

## 骨盤臓器脱手術の成功・不成功は術後に変動する

Success and failure are dynamic, recurrent event states after surgical treatment for pelvic organ prolapse.  
Jelovsek JE, Eunice Kennedy Shriver National Institute of Child Health and Human Development Pelvic Floor Disorders Network  
Am J Obstet Gynecol 224:362.e1-362.e11, 2021

**背景** 骨盤臓器脱に対する手術成功の適切な尺度は長年議論されてきた。解剖学的完成度に基づいた評価がこれまで主流であったが、患者主体の評価法も様々な骨盤臓器脱手術の成功度を比較するためには重要である。

**目的** 解剖学的な結果、自覚症状、再手術を要した症例で手術の成功・不成功の評価が一致するか検証する。

**方法** 1,250人のstage II以上の骨盤臓器脱女性に対する手術の成功度を3, 6, 12, 24, 36, 48, 60カ月で評価した。手術の不成功は①解剖学的不成功(POPQにおけるBa, Bp, Cが0より大きい)、②症状の不成功(腔膨隆症状の自覚)、③再手術またはペッサリー使用、のうち1項目以上を認めるものと定義した。Pelvic organ prolapse distress inventory(骨盤臓器脱困窮度)、健康関連QOL尺度(SF-6D)、質調整生存年(quality-adjusted life years)を手術成功または不成功とされる症例で比較した。

**結果** 1,250人のうち、433人(34.6%)が1回以上の

観察点で手術不成功とされた。そのうち85.5%(370人)が評価項目のうち1つのみを満たし(解剖学的不成功46.7%、症状的不成功36.7%、再治療2.1%)、12.9%(433人中56人)のみが解剖学的および症状的不成功の両項目を満たした。不成功症例の24.2%(433人中105人)が観察期間中に成功と不成功の間を移行し、83.8%(105人中88人)が観察期間の最後には成功に分類された。手術成功と不成功は術後1年と2年における質調整生存年と骨盤臓器脱困窮度、健康関連QOL尺度に関連していた。

**結論** 本研究では客観的および主観的評価の両方が一致した症例はわずか13%であり、また一時的に不成功とされた症例の多くが観察期間の最後には成功に分類されていた。従来の評価法では手術成功率を過小評価している可能性がある。

(東北大学産婦人科 石橋ますみ 抄)

## 恥骨直腸筋機能に対するペッサリー治療の効果

The effect of pessary treatment on puborectalis muscle function.  
Manzini C et al  
Int Urogynecol J 32:1409-1417, 2021

**目的** ペッサリー治療を行った骨盤臓器脱(pelvic organ prolapse; POP)の女性の恥骨直腸筋の機能が変化するか評価すること。

**方法** ペッサリー治療を選択したPOP女性を対象とした前向きコホート研究である。問診、臨床検査、3D/4D経会陰超音波検査が治療開始前と治療開始後3カ月で行われた。POPはpelvic organ prolapse quantification systemを用いて評価された。治療開始前と開始後で比較したパラメーターは、挙筋裂孔の安静時の面積(hiatal area at rest; HAreSt)、意図的に会陰を収縮させたときの面積(HAActx)、バルサルバ法施行時の面積(HAVal)、収縮による面積の変化(DISPL-ctx, HAreStとHAActxとの差)、バルサルバ法施行時の面積の変化(DISPL-Val, HAValとHAreStとの差)とし、肛門挙筋断裂(尿道括約筋と肛門挙筋の恥骨付着部との距離が左右いずれか、または両側で25mm以上)の有無で比較した。

**結果** ペッサリー治療を選択した162人の女性のうち、基準を満たした34人の女性が対象となった。平均年齢は64歳、平均BMIは24kg/m<sup>2</sup>であった。31人が膀胱瘤、8人が子宮脱、12人が腔後壁側の骨盤臓器脱を呈していた。21人(61.8%)がstage II、13人(38.2%)がstage IIIのPOPであった。リングペッサリーが最も使用された(97%)。すべての群で優位にDISPL-ctxが増加した(平均2.1%増加)。肛門挙筋断裂のない群では、HAreSt(平均4.1%増加)とDISPL-ctx(平均2.7%増加)が優位に増加していた。肛門挙筋が断裂している群ではDISPL-ctxは優位に増加しなかった。

**結論** 本研究ではPOP女性の恥骨直腸筋機能がペッサリーによって改善されることが示唆され、このような変化は肛門挙筋が断裂していない症例で起こると考えられた。

(東北大学産婦人科 石橋ますみ 抄)